温首相「友好の使者」

残留孤児一行が面会

「私には二つの家がある」。孤児らが作った歌を歌う松田桂子さん(左)の声に耳を傾ける温首相(右)＝11日、北京・中南海、大久保写す

【北京＝大久保真紀】全国の中国残留日本人孤児らからなる「中国人民に養育の恩を感謝する中国訪問団」の一行が11日午後、北京市中心部にある中南海で温家宝(ウェンチャオ)首相と面会した。「お帰りなさいと言いたい」と声をかけ、自ら中南海を案内するなど約1時間半にわたって対応した温首相に孤児たちは「感無量」と涙し、「私たちの命を救い、育ててくれた中国と養父母への恩は忘れない」と口々に話した。

面会は午後3時半すぎから。温首相は自ら外に出て迎え、孤児らと握手し、声をかけた。名誉団長の野田毅衆議院議員が「孤児の方々が夢にまでみた日だ」と感謝を述べると、温首相は「親類のように、今日はみなさんと心の話をしたい」と応じ、孤児らに自由な発言を促した。

東京都から参加した団長の池田澄江さん(65)は「我々のことを子どものように思っていてくれて感謝する」とあいさつ。さらに、07年4月に温首相が訪日した際、国会演説で孤児について触れたことを「(昨年4月から実施の)新支援策を作るのを後押ししてくれた」と述べた。温首相は「あなたたちは日中友好の使者であり、懸け橋だ」と語った。

新支援策の実施前は、約7割の孤児が生活保護で暮らしており、国外に出ると生活費が支給されなくなるため、訪中したくてもできない状況だった。